

【1】落語の歴史と「上方・江戸」の落語

落語はいつ誕生したのかという質問に、『竹取物語』、にみられる怪奇話や「なぞかけ」「ことばあそび」を挙げる研究者がいます。豊臣秀吉におとぎ話を聞かせた御伽衆の一人、曾呂利新左衛門が落語家の先祖であるともいわれます。『醒睡笑』の著者、京都の僧侶、安楽庵策伝が元祖という場合もあります。このように諸説ありますが、一般的に現在のスタイルの落語は、江戸時代に成立した話芸の一種とされています。江戸で大坂出身の鹿野武左衛門が芝居小屋や風呂屋で「座敷仕方咄」を始めた頃に、大坂では米沢彦ハが現れて人気を博しました。

上方落語は「見台」という小型の机を用い、小拍子で打ち鳴らして音をたてる演出があります。

(写真4)

これは京・大坂での大道芸として発展した「辻噺」の名残りといわれています。噺を聞く事が目的でない通行人の客足を止めるため、喧騒に負けず目立つ必要があったためと考えられています。対して江戸落語は、屋内で、少人数を相手にした噺であり、噺家も聞き手に遠慮せず簡潔とすることが粋とされた背景が特徴とされています。

【2】落語の「演目・演題」

「伊丹」が登場する「落語」はあるのか?それは何題か?ということについて考えてみますが、落語の「演目・演題」の定義というのが難しいのです。

まず、1点目は、6代目桂文枝は古典落語も演じますが、「創作(新作)落語」にも精力的に取り組んでおり、数百の作品があります。その他の多くの師匠たちも新作を発表しています。つまり、落語は日々誕生しています。古典落語として扱われる、明治期の三遊亭圓朝作【牡丹燈籠】や、【一文笛】も昭和34年頃の桂米朝の創作です。「古典」と「新作」の境界はなく、落語の「演題」の数はとりとめがありません。

2点目は、本来の「古典落語」を「改題」される場合があります。同じような内容でも、演者が題名を変えることがあります。特に、江戸落語と上方落語はそれぞれ違った内容で発展しましたが、東西の交流から、双方が言葉や内容を変化させて、相互に取り入れています。舞台となる地名を変えたり、サゲが同じでも途中の演出を変えたりして、全く同じものではないために、「演題」も違いが出て来ます。

江戸から上方に来たものに【酢豆腐】がありますが、上方では【ちりとてちん】として演じられます。【芝浜】は【夢の革財布】となります。逆に上方から江戸へ行ったものに【時うどん】という演目がありますが、江戸落語では【時そば】となります。【鴻池の犬】は【大どこの犬】となります。即ち、落語には「演題」の数と「内容」の数が同じでは無いことが生じます。

3点目は落語のストーリーを前後にわけて、前半を「A」として、前半後半を通して「B」というようなことがあります。前半だけ演っても十分作品としては成り立ちますので、短時間の寄席用に「A」を演じることも多いです。上方落語【首提灯】の前半を【上燭屋】とする例などがあります。落語は「演

題」の数と「内容」の数が同じではないことが生じます。

となると、伊丹に限らず「〇〇」が登場する「落語」は「何題である」と確定することは「難題」となります。

【3】[啞のつり] [昆陽の御池] (動画)

伊丹を題材にした落語といっても、「伊丹」を舞台にしているのか、話の中に「伊丹」が登場するのかで変わってくると思います。

上方落語の演目に「旅ネタ」があります。上方落語はその名のとおり、大坂が中心の話です。大坂を出発して旅に出る話が「旅ネタ」です。例外として、冥土、海底、天空などへ行きますが、一般的には大坂から東西南北へ旅をします。もっとも有名なのが【東の旅】とよばれ、伊勢神宮へ参詣に行きます。(注1)

西へは【播州巡り】、【兵庫船】、姫路の【皿屋敷】。南は【紀州飛脚】ですが、北はというと、【池田の猪買い】、【池田の牛ほめ】に見られる、池田までです。川西の【西行鼓が滝】などもありますが、東西南北の距離のバランスが悪いようです。

【池田の猪買い】で、大坂から池田へのコースはどうなっているかを見てみると、「左へ少おし行くと淀屋橋という橋があるなあ。淀屋橋、大江橋、蜆橋と橋を三つ渡る。お初天神の西門のところに「紅卯」という寿司屋がある。この寿司屋の看板が目印やなあ。こっからズ~ッと北へ一本道じゃ。十三の渡し、三国の渡しと渡しを二つ越える。服部の天神さんを横手に見て、岡町から池田じゃ」となっており、「伊丹」は通過しないようです。

伊丹が舞台となる落語は、ズバリ演題にその名のある【昆陽の御池】です。このお話も、前述のように、多くの演題になります。

上方落語で【昆陽の御池】[おしの魚釣り]。江戸落語で【おしの釣り】[昆陽の釣り]などとなります。【昆陽の御池】は伊丹の昆陽池を舞台にした落語です。浅学の私には、伊丹が舞台として登場する落語はこれしか知りません。東京では多くの場合【おしの釣り】という演題で、上野寛永寺不忍の池を舞台にして高座にかけられます。

元来『露新軽口ばなし』の『又いひそな事』が出典ですが、この落語のルーツは間違いない伊丹の「昆陽池」です。ストーリーは大坂から殺生禁断である昆陽池に釣りに行くというものです。

この嘶のなかで、大坂から昆陽池までのコースは詳しくは語られていません。

桂吉朝は「わしの行くのはな、大阪を北へ三里、西国街道をちょっと入ったところに「昆陽の御池」というのがある。」としていました。

ここで、大坂から伊丹までのコースを考えてみます。一般的に大坂から伊丹に行くルートは十三の渡し、神崎の渡し、と西へ進み、そこから北に上り、いわゆる「大坂道」としての「有馬道」へと入って行くのが一般的でしょうが、この嘶には条件があります。夜中に釣り道具を持った2人が、大衆の目を避けるようなコースを通らなければなりません。そうなると、昔は川幅が狭かったとはいえ、淀川・神崎川の河口を渡るのは困難なように思います。

すると、神崎のような「海側」ではなく、大阪からそのまま北へ三里、すなわち十三から北上して、西進するには、狭隘の川を徒步(かち)で越したのではないか、前述の【池田の猪買い】のコースに

近いと想像されます。

次に、何故「昆陽池」が舞台に選ばれたのかという事を考えてみます。この嘶の柱の一つに「殺生禁断」があります。仏教には、「殺生」「偷盜」「邪淫」「妄語」「飲酒」という五戒があります。このうちの不殺生戒により、寺社の境内などは殺生禁断の場所となり、魚鳥獸の捕獲を禁じていました。「昆陽池」は昆陽村（昆陽寺）が管理していました。見回りの役人がいたかどうかは定かではありませんが、昆陽寺の聖域であり、「行基鮒」[\(注2\)](#)伝説などから「殺生禁断」となっていました。現在もなお「殺生禁断」の碑が2柱あります。[\(注3・写真1\)](#)これらを目（耳）にした作者が、この落語の題材に選んだのでしょうか。

とてもよくできたストーリーなのですが、演題が露骨に「啞」と付いているためか、公共の電波にのることは少なくなりました。実際には障碍者は登場しないのですが、それがかえって差別意識を助長するのかもしれません。そのため、演題名を【昆陽の御池】としたり、サゲでの差別表現を省略したりしています。また、「こや」という地名は「木屋」「小谷」「古家」など種々ありますが、「昆陽」という難読地名が題材に適していたとも考えられます。

【4】[運つく酒][長者番付]

上方落語は、前述のように大坂の嘶です。伊丹は「津の国の隠れ里、かくれなし」として、発展していましたので、落語の嘶の中に伊丹が使われることがあります。江戸落語ではネタの場所を江戸に設定することが多いので、上方の「伊丹」が登場することは少ないのです。江戸落語の【長者番付】は、上方落語では【運つく酒】として演じられますが、江戸・上方ともに「大阪のはずれの伊丹」という語が出てくる、「旅ネタ」【東の旅】です。[\(注1\)](#)

嘶の中心は、「鴻池新六が伊丹で清酒製法を発見し、とんとん拍子に運がついた」というものです。すなわち、清酒発祥にかかる「鴻池善右衛門」のルーツをモチーフにしている所から、必ず「伊丹」は登場するのです。[\(注4・写真2・7\)](#)

造り酒屋の主人がすごい態度をとるので、「どうんつくめが！」[\(注5\)](#)と感じたところ、逆に、主人の手下に取り囲まれて、「うんつくとは、どういうことだ？」と詰め寄られます。そこで、壁に貼ってあった「長者番付表」で切り抜けるというものです。

実際の伊丹の登場場面は

「大阪のそばに伊丹てえどこがあるんだ。あそこはお前、造り酒屋やっててな……」
「鴻池の先祖は伊丹で造り酒屋をしていたが、そのころはまだ清酒というものがなかった。あるとき、番頭が金の始末が悪く、辞めさせると、腹いせに火鉢を酒樽に放り込んで逃げた。ところが、運は不思議で、灰でよどみが下に沈み、澄んだ酒ができた。これを清み酒として売って大もうけ、運に運がついて、ドンドン運が付いてど運つく、だから大身代ができた。」となっています。

この嘶に登場する「番付表」とは、元来、大相撲における力士の順位表をいったものですが、すでに江戸時代にはこの形式を借りて、園芸植物の品種や各地の名所、温泉、三味線演奏家、遊女、落語・講談などの寄席芸人や歌舞伎役者など、ありとあらゆるものランク付けし、それを番付表として出版することが盛んに行われました。この嘶の「長者番付」も盛んに発行されていました。

【5】[鶯とり] [商売根問] (動画2)

伊丹は大坂に近いので「池田の牛で、いたみいる」(伊丹へ入る。痛み入る。恐縮)というシャレ言葉や、「いたみのさけけさのみたい」という回文は古くから知られていたようです。桂枝雀はマクラでも、ヨク「伊丹」をからめていたように思います。

桂枝雀がオハコにしていたのが、[鶯とり]です。東京では[雁釣り] [雁とり]となります。

原話は、笑話本『鳩灌雑話』の『鶯』『鶯の次』ですが、教科書にも『かもとりごんべえ』として登場します。噺の前段で「雀を酔わせて捕まえる。」という話がでてきます。

この噺で雀を「酔わせるもの」に、「伊丹名物(こぼれ梅)」が登場します。(写真3) こぼれ梅とはみりんの搾り粕のことです。落語では[青菜]の「柳陰」とともに「味酔」には縁があるようです。

「中山寺へ参ったら、よう土産に買うて来まっしゃろ、伊丹の名物で」と語られています。

私の感覚では「こぼれ梅」は「伊丹名物」ですか?というところですが、この「こぼれ梅」こそが、この噺の笑いの根幹なのかも知れません。演者によっては「こぼれ梅」を使わずに、「米を酒に漬けておく」というような演出もありますが、「こぼれ梅」こそが笑いを誘う、他に置き換えることのできない必要不可欠の名前だと考えます。「どんな味なのか」是非にも食べてみたいと思わせるアイテムなのだと納得です。また、「こぼれ梅」は話の前半に登場するのですが、この噺の途中までが全く同じになる[商売根問]があります。

【6】その他の伊丹に関連するもの

◎「伊丹」が噺の中に登場するもの

[一文笛]では「そこになあ、伊丹屋っちゅう酒屋があるやろ」があります。

[菊模様皿山奇談](圓朝)では「武骨な松蔭や秋田屋がお酌をいたしましては、池田伊丹の銘酒も地酒程にも飲めんようなことで」というのがあります。

話の中に「伊丹」が出てくるといつても、「伊丹」が必ず出てこなければならないというものではないのですが、「伊丹屋」などを使う演者はいます。[鶯取り]にみられるように、桂枝雀はいろいろな落語のマクラにも「伊丹」を登場させていました。

◎「鴻池」が登場するもの

[鴻池の犬]では「実は手前、今橋に住んどります鴻池善右衛門の所の手代で、太兵衛と申すもんでございます。」があります。

[簀の火]では「明くる年、お盆、ちょ~ど食の旦那が鴻池のご本宅にご在中やということを聞きましたんで、」があります。

[はてなの茶碗]では、本人登場です。大阪の金持ち鴻池善右衛門の台詞として「茶金さん、その茶碗せひともわしに売ってもらいたい。」となっています。

上方落語は、大坂の噺ですから、大坂近郊で酒造りの伊丹、大坂の財閥など「鴻池」が出てくる

落語は多いです。伊丹出身（写真2）というよりも、大坂の豪商として登場します。「鴻池」はこのほかにも〔三十石〕〔占いハ百屋〕など非常に多く登場します。

◎「行基」が登場するもの

〔不精の代参〕に登場する「能勢の妙見さん」は、行基により開かれた古刹です。

〔西行鼓が滝〕に登場する「鼓が滝」は上記「能勢の妙見」近くにあります。また、西行法師終えんの地である大阪府南河内郡の弘川寺は、天智天皇四年に開創され、ここで行基や空海が修行をしています。

〔野崎詣り〕で参詣する「野崎観音」は大阪府大東市にある曹洞宗の禅寺で、福聚山慈眼寺といい、本尊の十一面觀音は行基作と言われています。

その他に〔茶漬けえんま〕〔粟田口〕〔天狗裁き〕などに行基がでてきます。

◎「高師直」が登場するもの

〔田舎芝居〕で「さすが江戸の役者はえれえもんだ。師直が福助（塩冶判官）に早変わりしただんべ」と芝居の中で高師直が登場します。

落語に登場する「芝居」には歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』を扱ったものが多くあります。そのため、高師直を塩谷判官の臣である大星由良之助らが討つ話に登場します。

その他に〔四段目〕（上方では〔蔵丁稚〕）〔七段目〕〔質屋芝居〕〔中村仲蔵〕〔二八淨瑠璃〕〔辻八卦〕などがあります。

◎「茨木童子」が登場するもの

〔茶釜のケンカ〕では「後醍醐天皇七歳の時萩を見物なさった。その時に茨木童子が現れて明日は雨なりと申し上げた。」とあります。

◎「雨乞い」が登場するもの

〔雨乞源兵衛〕では「向こおの禰宜（ねぎ）さんつかまえてな「雨乞いしてくれ」」とあります。

◎「剣菱」「男山」が登場するもの

〔片袖〕では「それは肩癖（けんびき）じやい。え、向こおの酒は「男山」だ「剣菱」やちゅうてへんわい」があります。

〔三味線栗毛〕では「百万石も剣菱も摺れ違うたる江戸の街」と、なぞかけのような登場です。

◎「井原西鶴」が登場するもの

〔西鶴一代記〕は立川談志の創作ですが、その中に「太宰治がモーパッサンよりも誰よりも、世界で一番偉い作家といわしめた井原西鶴。」とあります。

◎「近衛殿下」が登場するもの

〔茶金〕は前述の鴻池善右衛門登場の江戸落語ですが「それから10日ばかりたつってえと近衛

殿下が帝の茶席に招かれました。」(金原亭馬生)とあります。上方落語【はてなの茶椀】では、「関白鷹司公」などとなります。

◎岩佐又兵衛が登場するもの

【大名房五郎】では「最後まで持っていた形見の軸は、岩佐又兵衛の絵で、遠山が在ってその下に橋が架かって」とあります。

◎大塩平八郎が登場するもの

元来講談である【瓢箪屋裁き】(大塩が登場する)を落語として、高座にかける場合があります。

◎鎮西八郎為朝(八幡)が登場するもの

【八問答】では「ハという字は出世をする字でもある。八幡太郎義家、鎮西八郎為朝、八五郎……」となっています。

◎聖徳太子が登場するもの

【聖徳太子】桂竹千代作では「聖徳太子、いろんな政治を補佐しながら行政を残していきます。603年に冠位……」とあります。

他に【聖徳太子と雪丸】【天王寺詣り】【伽羅の下駄】など

◎「ムクロジ」が登場するもの

【茶の湯】では、すばり「棕(むく)の皮でおます。あの昔、石鹼の無かった時分に、洗濯をするのに使こおた棕の皮というやつでござります。」となっています。

落語では棕の木の皮としていますが、石鹼の代用にしたのは「無患子(むくろじ)」ムクロジ科の落葉高木です。

◎頼山陽に関係するもの

三遊亭円生の嘶、圓朝作【操競女学校・お里の伝】は頼 山陽が書いたものを、圓朝が人情嘶として作り直したものです。

◎松尾芭蕉に関係するもの

三重県松阪市の落語家桂文我が、伊賀出身の俳聖・松尾芭蕉を書いた創作落語絵本『ばしようさんとかっぱ』(小学館)を出版しています。

◎和泉式部に関係するもの

京都市中京区にある誓願寺は、第五十五世・安樂庵策伝上人の著書『醒睡笑』が、後に落語のネタ本となったため、「落語発祥の地」として知られています。この寺はその昔、和泉式部が48日間籠って、尼となり、誓願寺の近くに、誠心院という庵を結び、めでたく往生したといいます。

◎素戔鳴神社に関係するもの

『落語で読む古事記』(はじめりは高天原 スサノオノミコトヒクサナギノツルギ)「桂文枝」(PHP)があります。

◎桂枝雀について

桂枝雀(1939-1999)は1946年から1971年まで伊丹市に居住していました。伊丹の下宿先で、結婚し弟子ももっています。枝雀襲名前「桂小米の会」は伊丹市の杜若寺で1971年に始まりました。

◎いたみはなしの会について

昭和63年(1988)年に伊丹市立演劇ホールが設立されました。そこで、当時では珍しい、プロの漸家が素人に教えるという「落語教室」を発足させました。卒業生が「いたみはなしの会」をつくり、活動しています。

◎伊丹ストリート落語について

平成15年(2003)に「伊丹まちづくり会議」という市民グループが「招福高座」等を展開し、「第二の枝雀を育てよう」というスローガンで「伊丹ストリート落語」を定期的に開催しました。(写真4)

そこに出場した小学生が2人、「こども落語全国大会」で年度を変えてそれぞれが全国優勝を果たしました。

◎NHK 連続テレビ小説について

平成19年(2007)NHK 連続テレビ小説『ちりとてちん』が放映されました。上方落語と出会い、落語家を志す。という人情ドラマですが、脚本を書いた藤本有紀は伊丹市出身です。

◎寄席の開催について

現在でも、桂米朝一門をはじめ、各師匠達が定例的に伊丹で各種寄席をかけています。伊丹ホールだけではなく、「岡田家」「本泉寺」「長寿蔵」「三軒寺前広場」「白雪ホール」などで、幅広く開催されています。

◎桂米朝の墓について

3代目桂 米朝(1925-2015)は、日本の落語家です。本名を中川 清といい。現代の落語界を代表する落語家の一人で、第二次世界大戦後滅びかけていた上方落語の継承に努めました。その復興への功績から「上方落語中興の祖」と言われています。

兵庫県姫路市出身で、1996年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、2009年には演芸界初の文化勲章受章者となりました。

伊丹市は大阪の衛星都市といえます。そのため、桂枝雀をはじめ、伊丹に住んでいた漸家師匠が多いです。桂米朝は若いころから伊丹に近い尼崎市武庫之荘在住でしたが、没後は、姫路市名誉

市民として姫路市の名古山靈苑内に築かれた墓所に入りました。その「名誉市民墓」は、上から見ると「米」の字をかたどった形に石が配されたものとなっています。**(写真5)**

しかし、桂米朝には生前から、家族の死去に伴い、伊丹市昆陽寺に墓があります。**(写真6)**